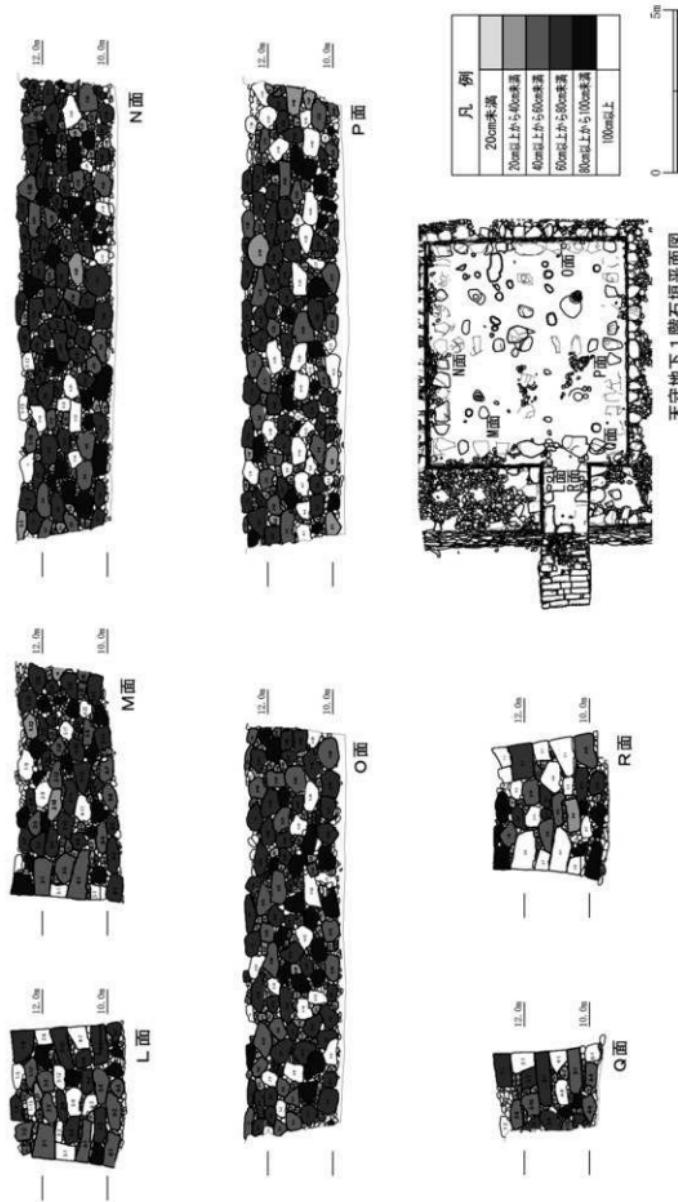
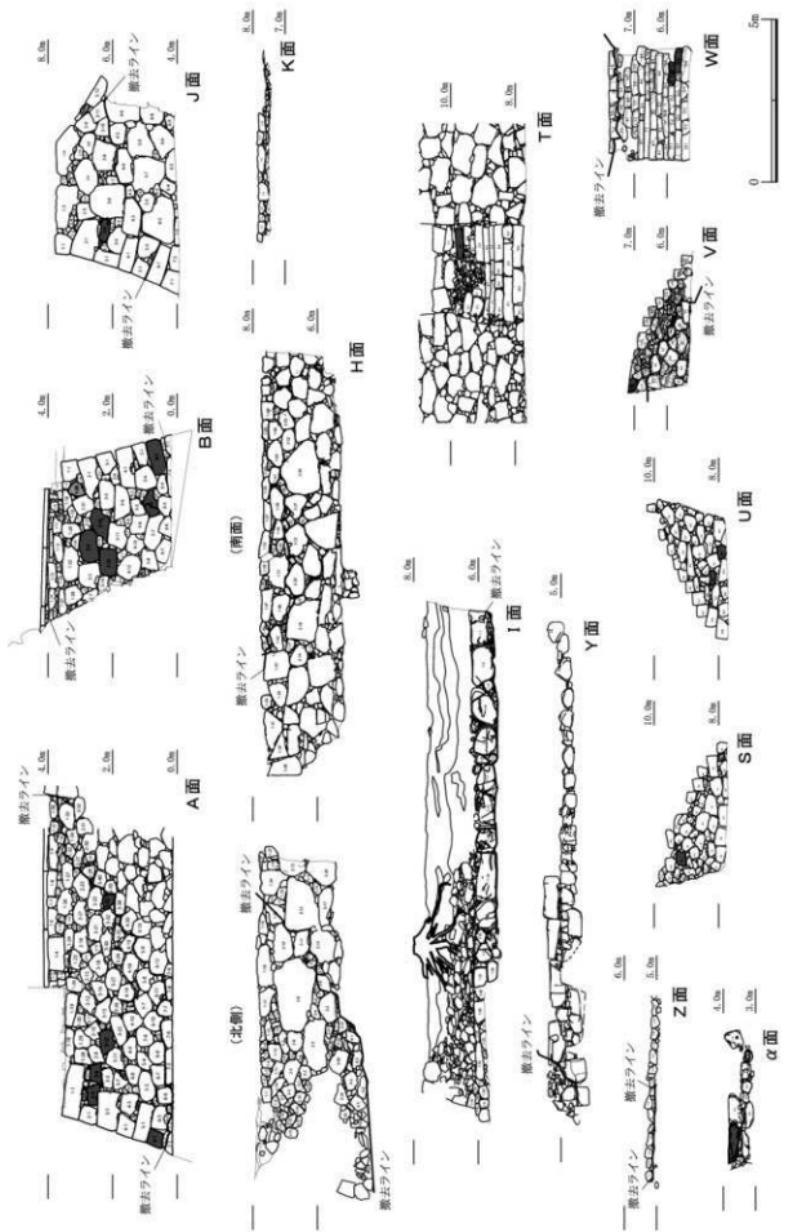


第3-32図 天守台石垣E面・F面・G面石材性長区分図 (1/150)

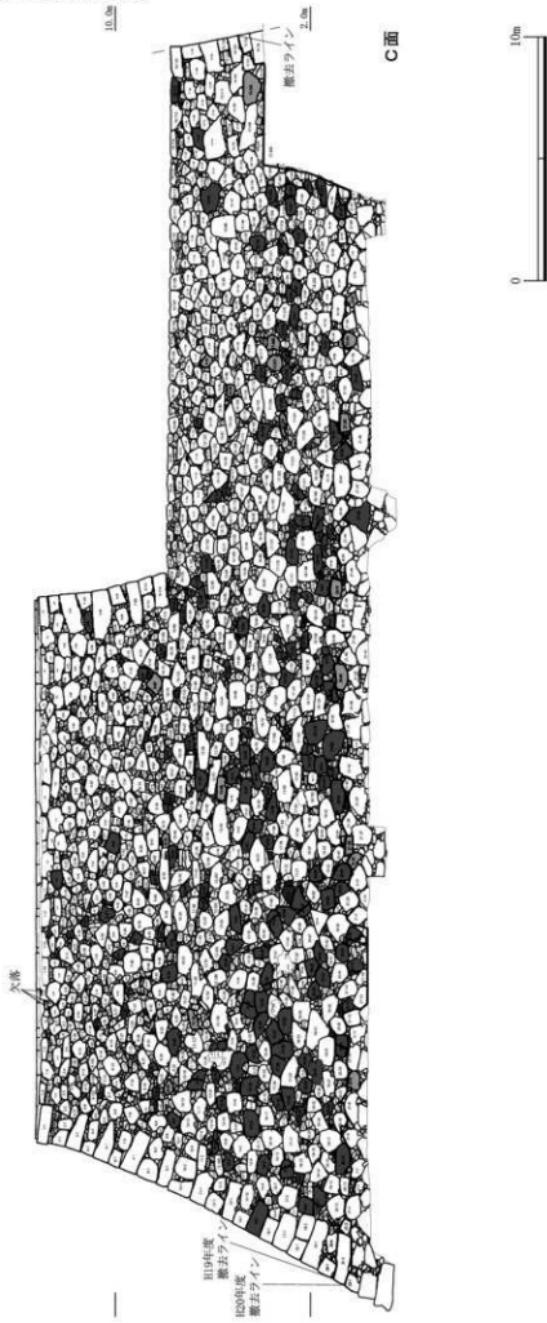


第3-33図 天守地下1階石垣各面石材焼長区分図(1/150)

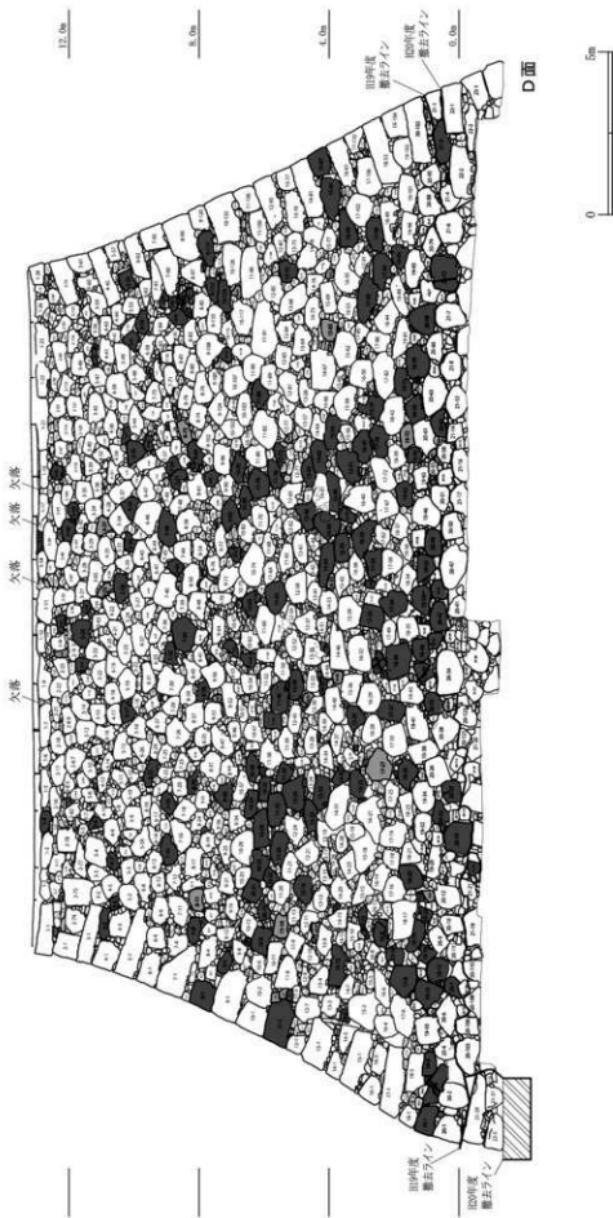


第3-34図 天守台石垣A面・B面・H面・I面・J面・K面・S面・T面・U面・V面・W面・Y面・Z面・α面剥れ石分布図(1/150)

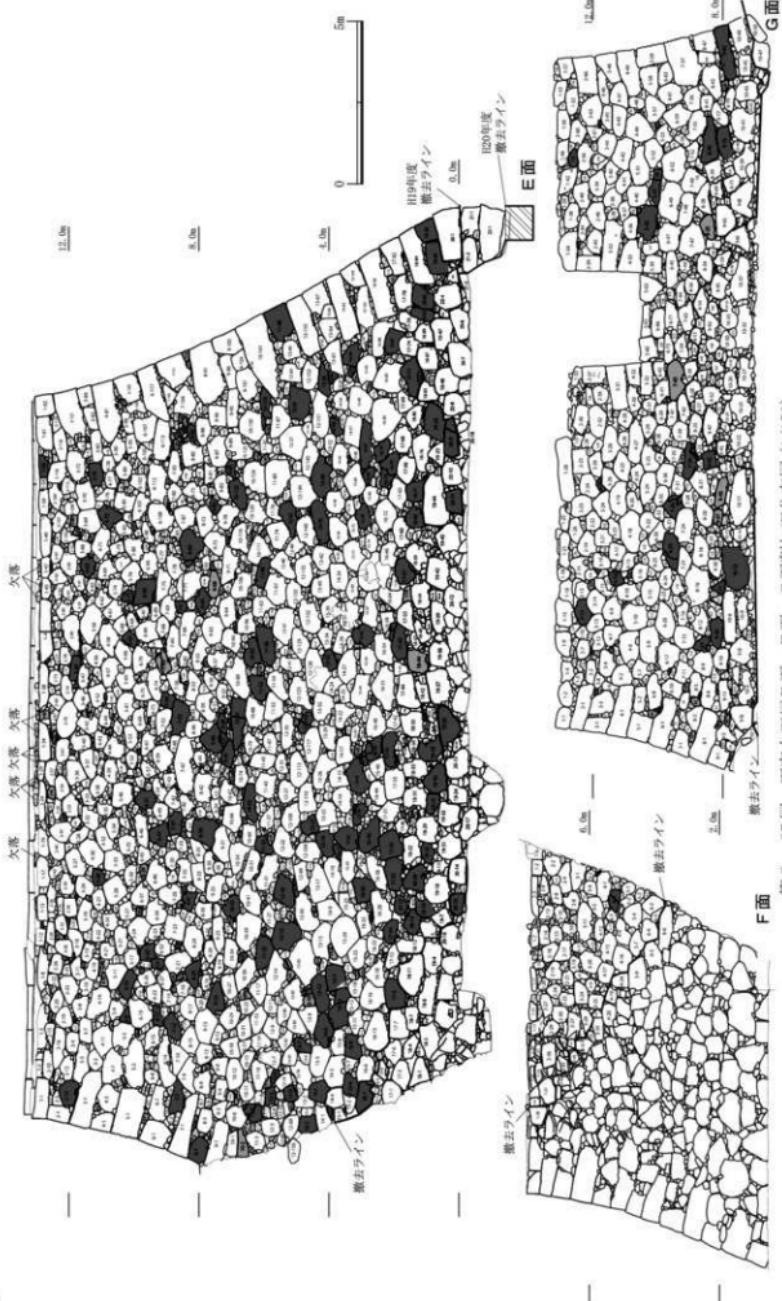
第1節 解体前の石垣の状況



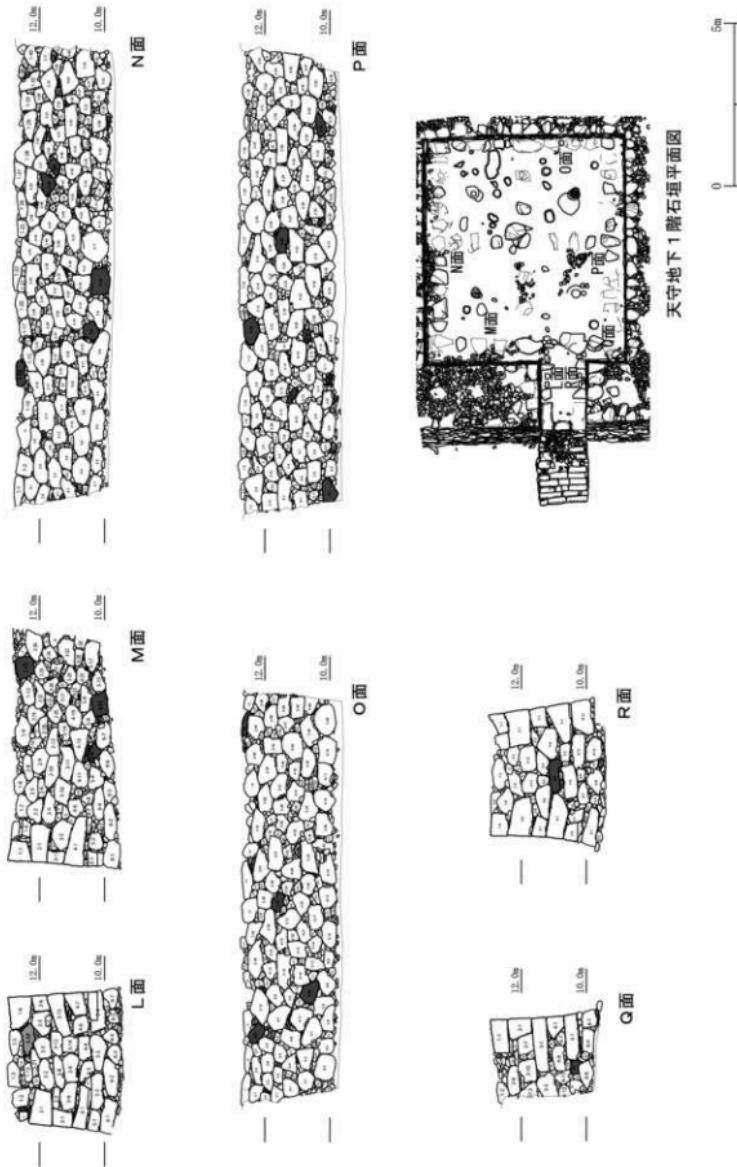
第3-36図 天守台石垣C面削れ石分布図(1/200)



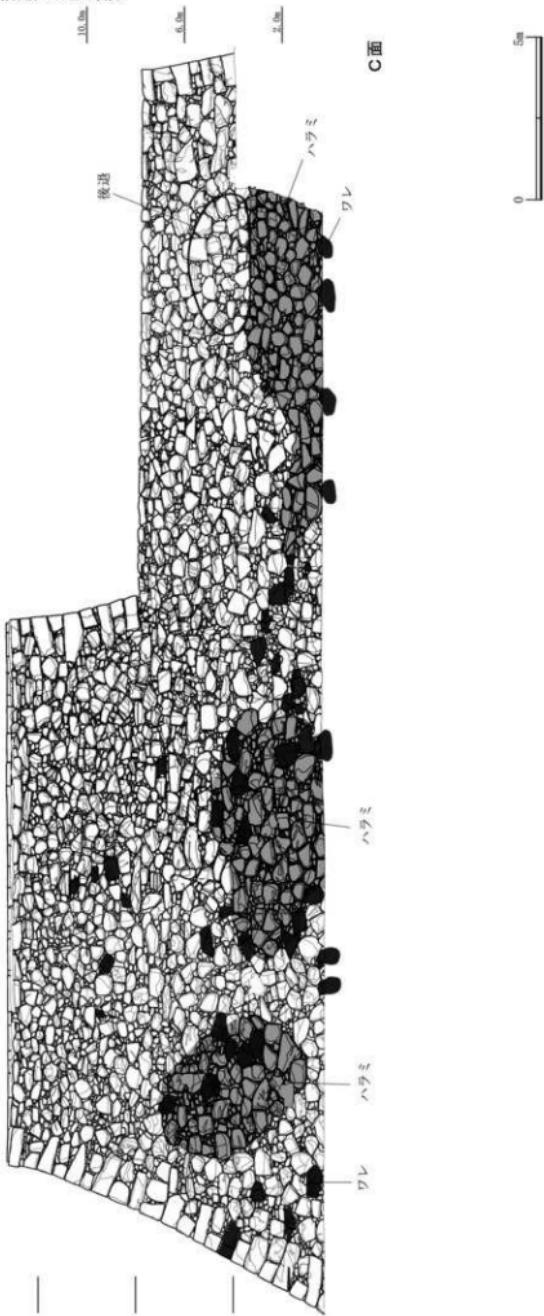
第3-36図 天守台石垣D面削丸分布図(1/150)



第3-37図 天守台石垣E面・F面・G面割れ石分布図(1/150)

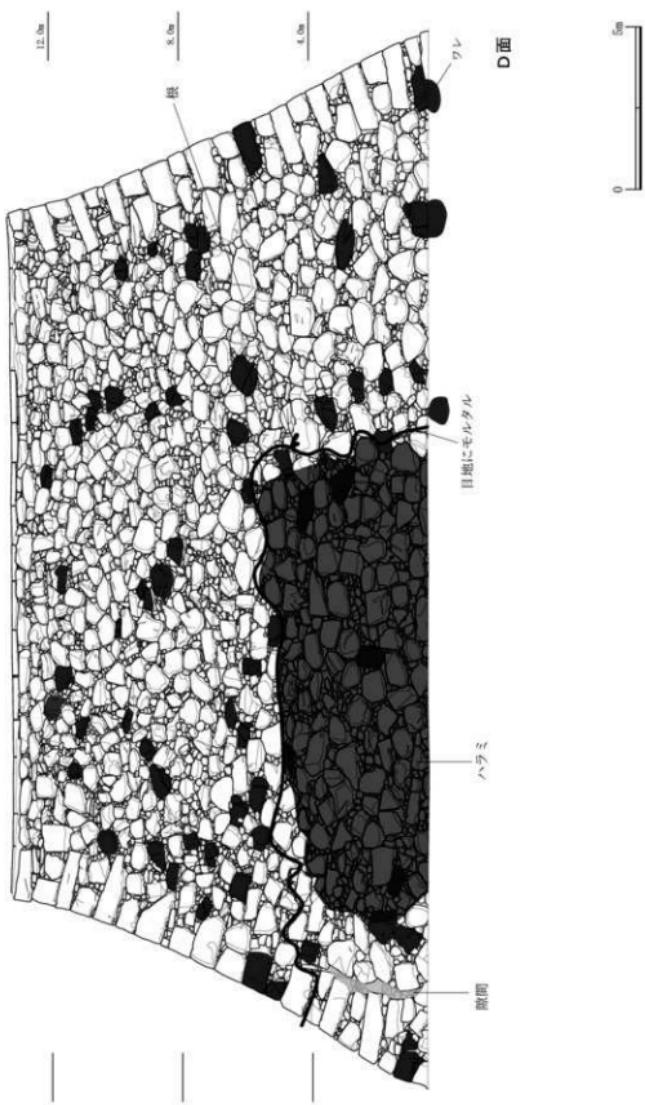


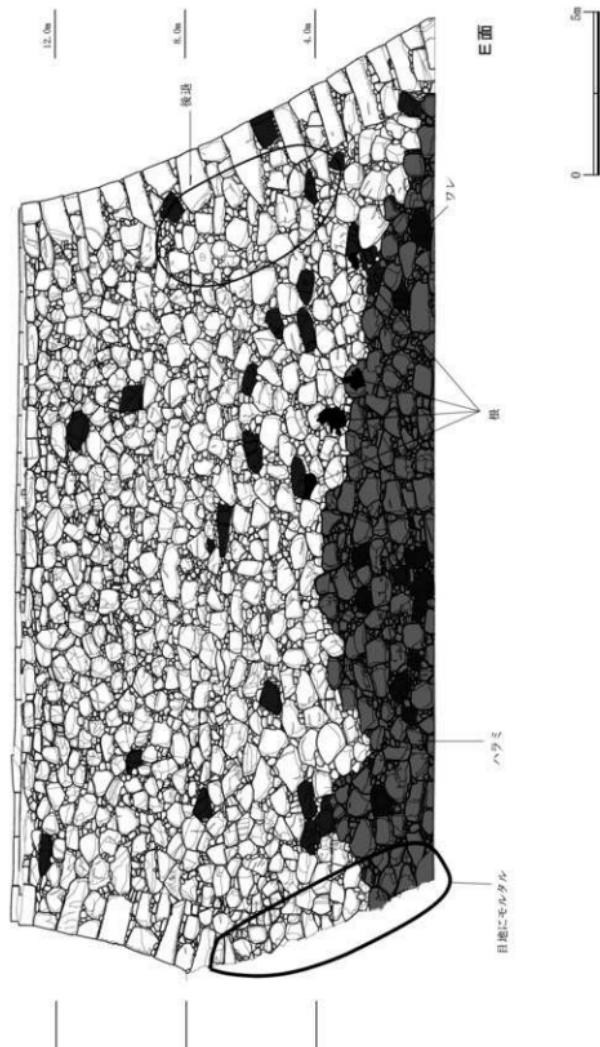
第3-38図 天守地下1階石垣各面割れ石分布図 (1/150)



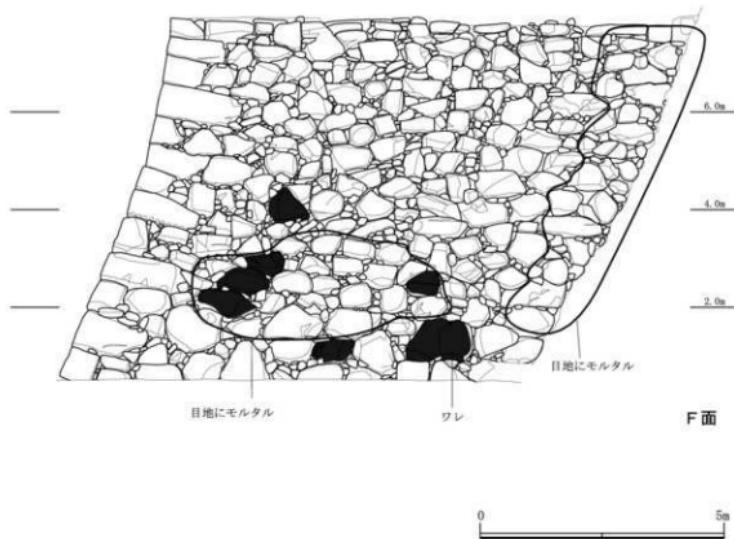
第3-39図 天守台石垣C面破損状況 (1/200)

第3-40図 天守台石垣D面破損状況(1/150)





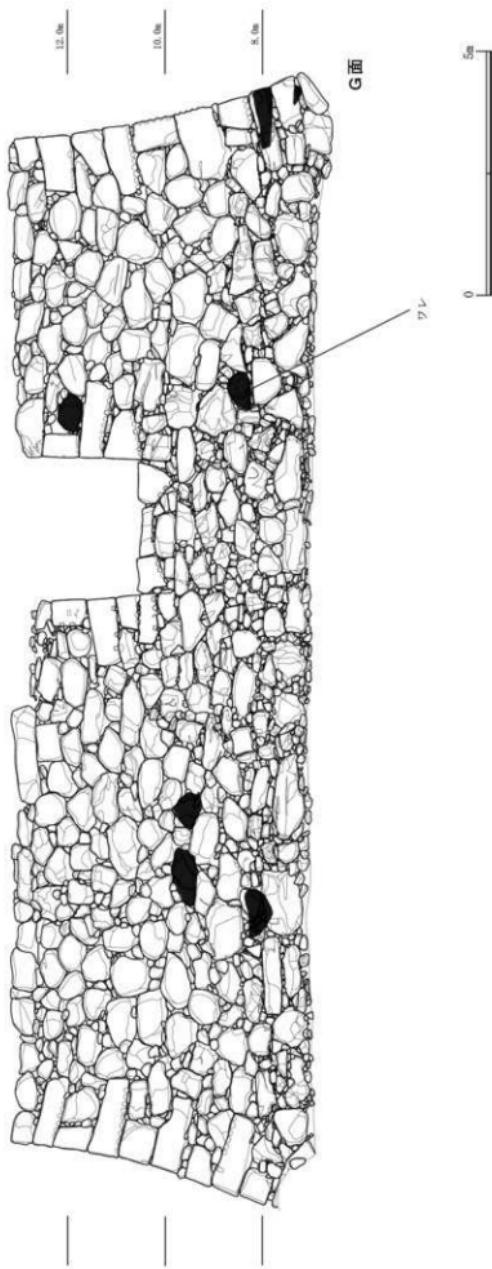
第3-41図 天守台石垣E面破損状況 (1/150)



第3-42図 天守台石垣F面破損状況(1/100)

ハラミの上面に人が乗れるほどであった。また、比較的上部までワレが確認でき、石垣の面が不ぞろいになっていた。ハラミを食い止めるために、目地にモルタルを入れる補強がなされていたが、そのモルタルごとさらにハラミが見られる状況であった。また、解体時に南東側の根石の状況を確認すると、根石が堀側に向かって沈下しており、前転びしたような状況であった。E面では下部全城にハラミが見られる。また、ワレも中位よりも下に集中する。右側の中位には築石の後退も認められた。一方、F面との接点付近では目地にモルタルが認められる。また、樹木の根が中央やや右寄りで複数石垣上に張り出しており、石材を押している状況であった。天守台ではないが、E面に接するF面でも下部でのワレのほか、目地にモルタルを入れた補強の痕跡が認められる。このように、内堀に面した石垣の破損状況が大きいことが見て取れた。

その他の地点であるが、玉藻廟の基礎により埋められていたためか、天守地下1階の石垣は天端の搅乱があるものの比較的良好であった。天守台前面・本丸虎口ではズレや間詰め石のヌケ、ハラミなどは各所で認められる。また、中川橋台では、明治期の改変に伴って南面石垣がほぼ崩されており、南に傾斜する斜面状になっていた。



第3-43図 天守台石垣G面破損状況 (1/100)

#### 第4項 貝殻の付着

貝殻が付着した石材の分布を第3-44～48図に示した。内堀で海水に接する標高1.7mよりも上位に位置する石材にも多く貝殻の付着が見られるため、石垣の構築以前に付着したものであることがわかる。これらは石材が海浜部に存在していた際に付着したものであると考えられる。可能性としては、石垣の構築時に海水に接する場所に石材を集積しており、その際に付着した場合と、自然石として海浜部に存在していた石材を築城にともなって集積してきた場合が考えられる。

#### 第2節 上面発掘調査

##### 第1項 既往の調査概要

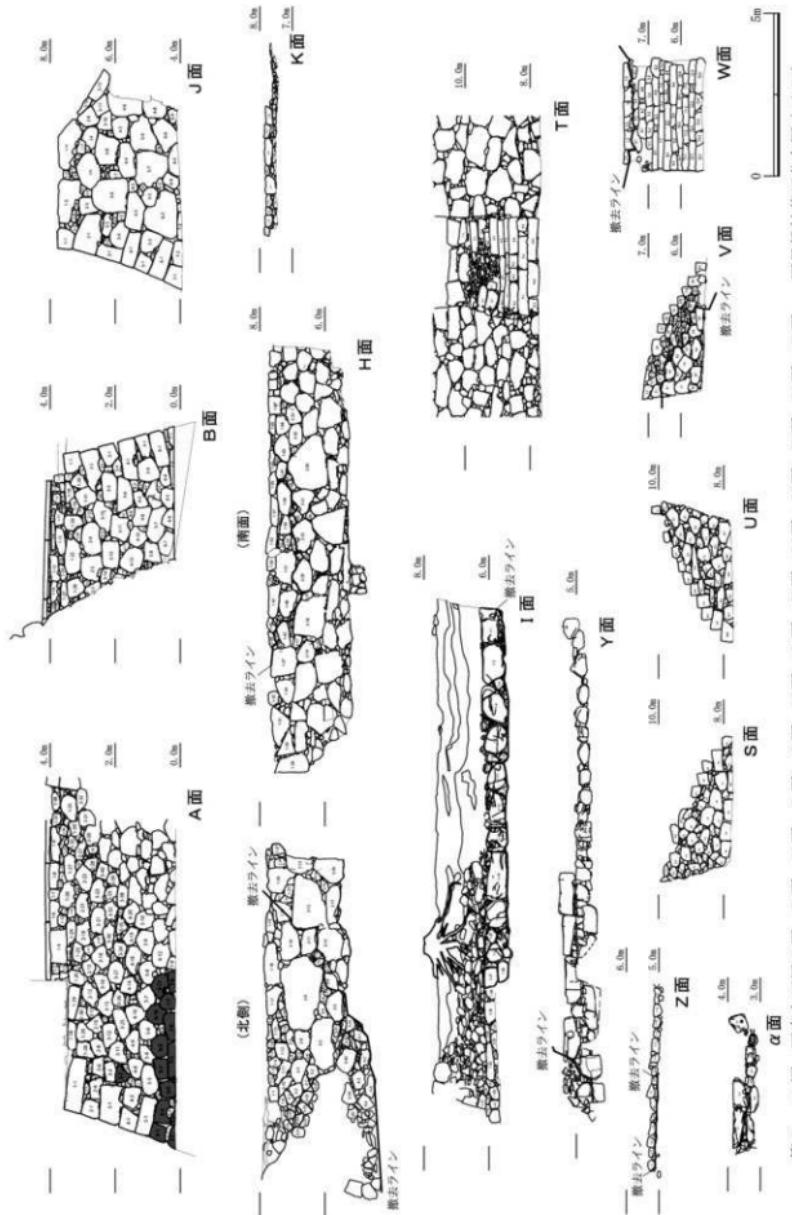
天守台石垣の解体に先立ち、天守台上面の発掘調査を実施した。詳細は高松市教育委員会2012『史跡高松城跡整備報告書第6冊 史跡高松城跡（天守台）－発掘調査編－』を参照いただきたい。ここでは、調査成果の概略を紹介する。

発掘調査の成果として特筆すべきは、天守地下1階を検出したことである。地下1階を構成する石垣および、地下1階底面にて礎石58個と柱穴4基を検出したほか、天守1階部分においても礎石と礎石抜取り痕を検出した。礎石は平面「田」の字形に配置されており、4箇所の空白地に柱穴が確認できた。また、礎石に残った痕跡から、土台の寸法が明らかになり、『小神野筆帖』に記載された天守の寸法と合致したことから天守の大きさを示す有力な根拠を得ることができた。柱穴から出土した天守の柱材はC<sup>14</sup>年代測定により1630～1660年代に伐採されたことが判明しており、柱穴は正保4年（1647）から寛文10年（1670）の松平頼重による改築時に掘削されたと考えられる。

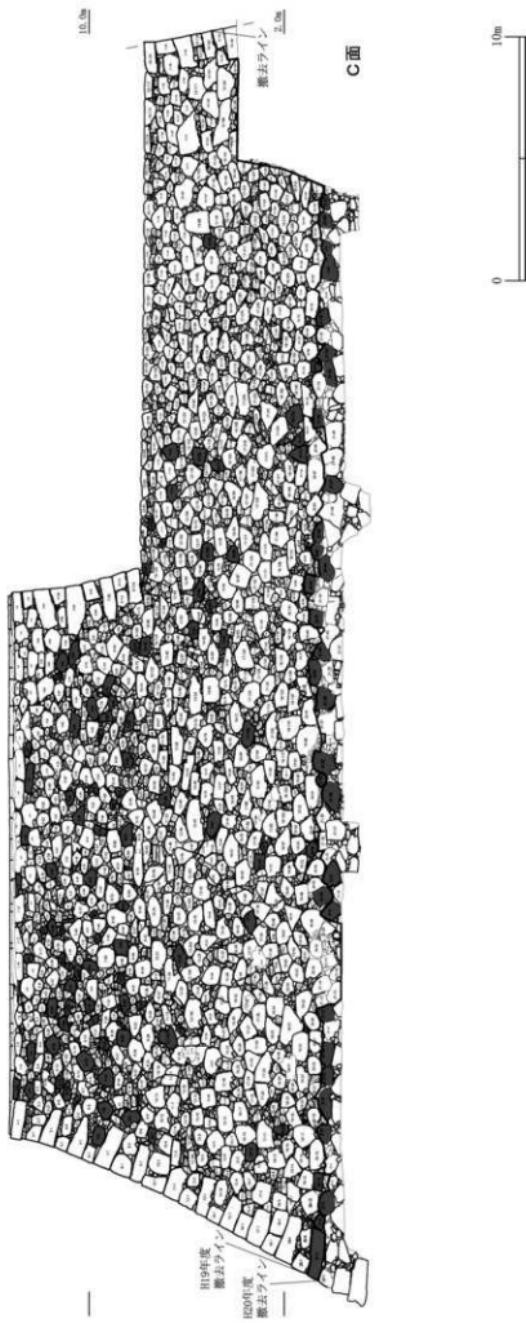
また、天守台前面においては、玉藻廟の階段の下から、天守へ上がるための上下2段の石段を検出したほか、本丸南側多聞に伴うと考えられる石垣も検出した。同石垣はさらに西に続き、地久櫓台へと続くと想定される。

天守に連続する北西側の多門櫓である中川櫓台については、多門櫓に伴う礎石を検出したほか、櫓部においては石組みの水路を検出した。また、中川櫓台の西側櫓部では門の礎石を検出しており、『旧高松御城全図』に記載された櫓門の一部であると考えられる。

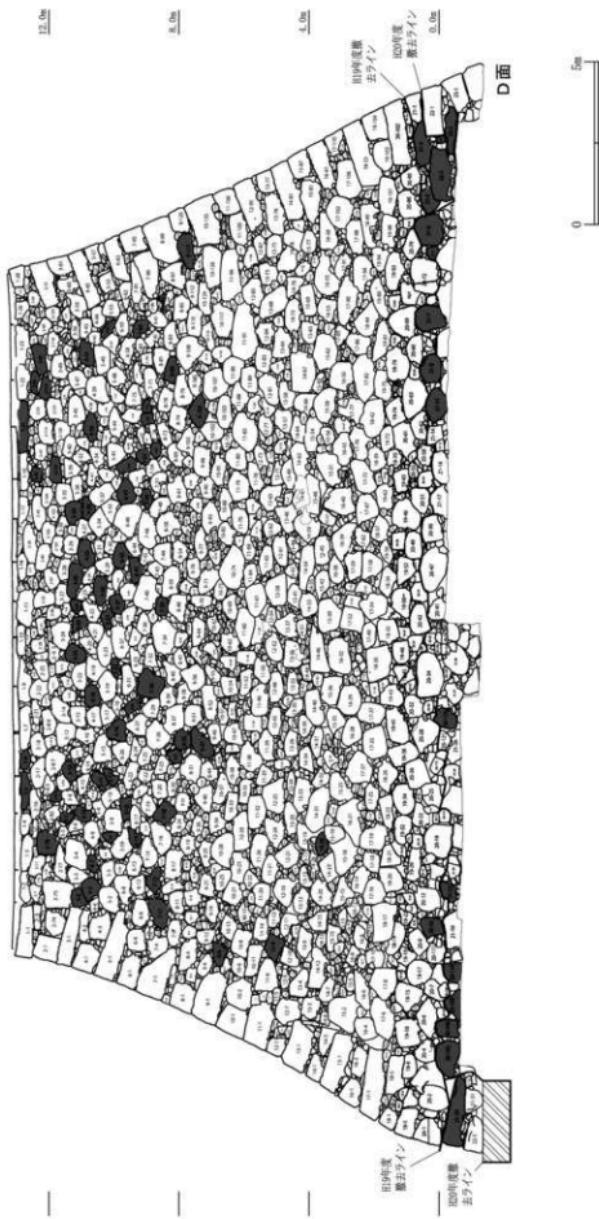
本丸虎口においては、鞘橋を渡って西へ折れた部分において石段を検出したほか、豊島石製の暗渠排水を検出した。



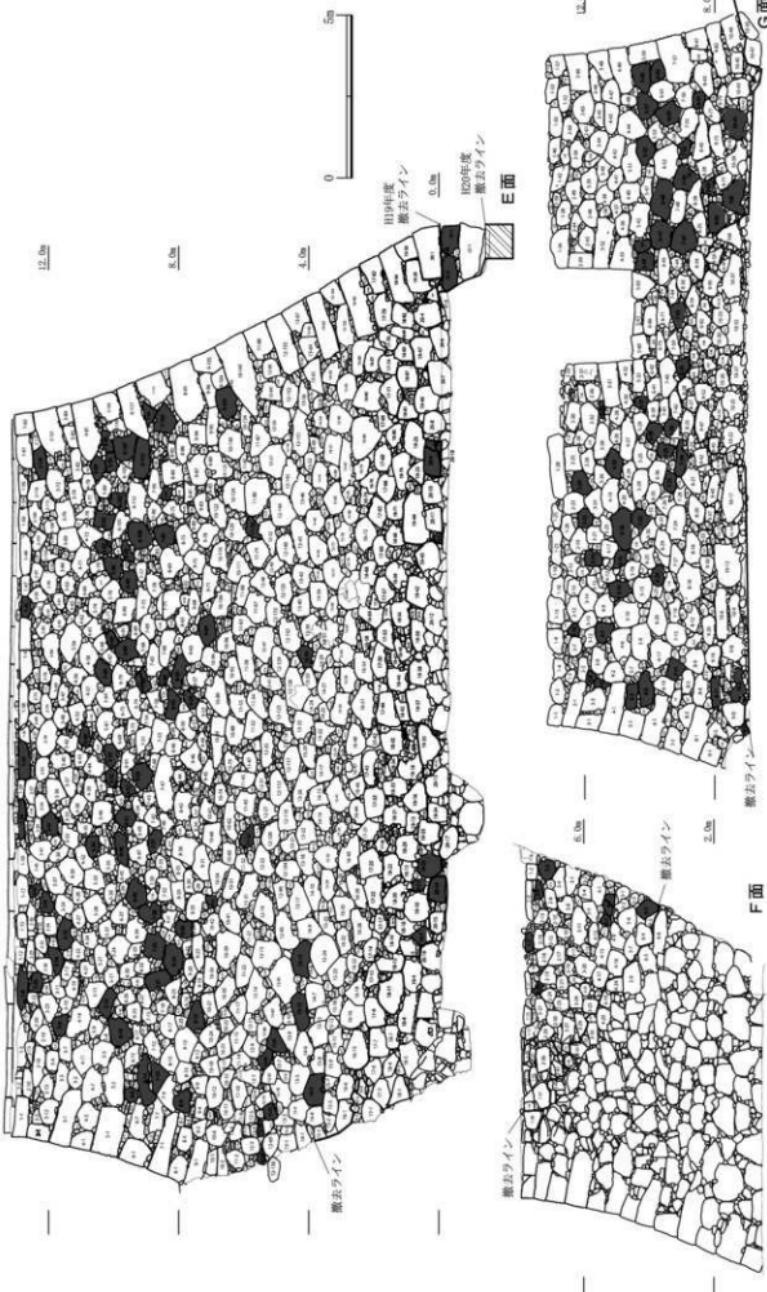
天守台石垣 A面・B面・H面・I面・J面・K面・S面・T面・U面・V面・W面・Y面・Z面・α面具微付着石分布図(1/150)  
第3章3-44図



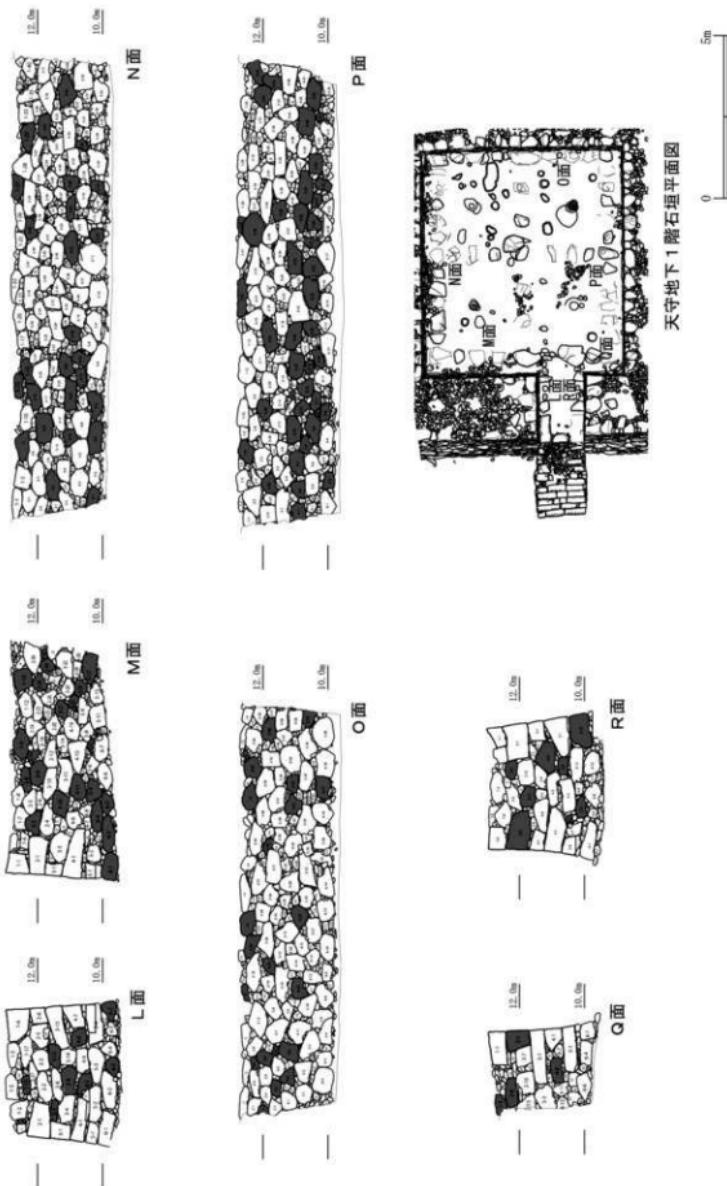
第3-45図 天守台石垣C面貝殻付着石分布図(1/200)



第3-46図 天守台石垣D面貝殻付着石分布図 (1/150)



第3-47図 天守台石垣E面・F面・G面貝釘付着石分布図 (1/150)



第3-48図 天守地下1階石垣各面具装付着石分布図(1/150)

## 第2項 追加の発掘調査

本丸虎口で舗装工事を実施するに先行して、平成25年1月8日～1月18日の期間で発掘調査を実施した。今回調査対象とした範囲は、本丸虎口の中でも、本丸に西向きに登る階段の麓で、J面石垣の西側にあたる平坦部（約23m<sup>2</sup>）である（第3-53図）。対象地の北側ではかつて発掘調査を実施しており、南北方向に延びる石組の暗渠排水等の構造を検出している。この詳細は高松市教育委員会2012『史跡高松城跡整備報告書第6冊 史跡高松城跡（天守台）—発掘調査編一』の第3章第9節に記載しているので参照していただきたい。

今回の調査に当たっては、調査対象地内に十字方向の畦を設定して掘削をすすめた。畦の設定に当たっては、調査区の中央付近で上記の石組溝が検出される可能性が高かったため、南北方向の畦を中心より東に1m程度移動させて設定した。東西方向の畦は対象範囲の中央に設定した。調査成果は以下のとおりである。

### SD 1

調査区中央において、前回調査で検出した南北方向に延びる石組溝がさらに南へと連なるものである。南端が近代の搅乱により壊されており、残存状況から蓋は全長4.02m以上、身部は全長4.25m以上を測る。溝の掘り込みは前調査と同じく現地表から5cmの深度において検出され、掘り方の上面幅もほぼ同じく0.80m、底面0.50m、深さは0.30mを測る。石組の幅・内部の幅・構造は前回の調査において検出したものとほぼ同等であり、掘方に漆喰を含んだ淡黄色～暗褐色シルト質細砂が充填されていることから同時に施工されたことがわかる。この施工時期についてであるが、今回検出した遺物は数点の瓦片に止まるが、前調査時に肥前系磁器碗を検出しておらず、18世紀に所属する可能性が高い。



第3-49図 遺構検出状況（南東から）



第3-50図 SD 1・SX 1 検出状況（北から）

### SX 1

調査区南側で検出した南北長約0.90m、東西長約0.80mの方形を呈した搅乱である。SD 1の南端を切り、焼土・炭化材・小砾と共に瓦片・銅線・磁器片といった遺物を含んだ。所属時期はおそらく近代以降である。

## S X 2

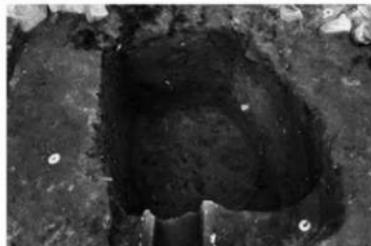
調査区東側で検出した搅乱である。現地表から 5 cm の深さで S D 1 の石組に類似した石片が見られ、精査したところ、焼土混じり搅乱に一石の切石と数点の切石片が投棄されており、いずれも方形を呈していた。これらは欠損があるものの、その厚みや幅から各面の石材に分けることができ、蓋石に該当するものを抽出して復元すると約 1.1 m 長と算出できる。この値は S D 1 の南端部において蓋石が欠損している箇所と S X 1 の南北幅に概ね相当する。

## 小結

今回の調査で、本丸虎口の中央を南北に走る石組みの暗渠排水溝がさらに南へと延びることを確認した。第 3-53 図左上は今回の調査図に前回調査分を合成したものである。この暗渠は後に S X 1 を掘り込んだ際、その一部が取り除かれ S X 2 へと廃棄されたと考えられる。廃棄された石材の形状から本丸側へとさらに南行する可能性が考えられるが、後世に改変された石垣（1025 面）により南が阻まれている現状である。

本丸虎口から本丸に向かう動線は近代に大きく改変されたことがわかっており、今回の調査範囲もその例外ではない。

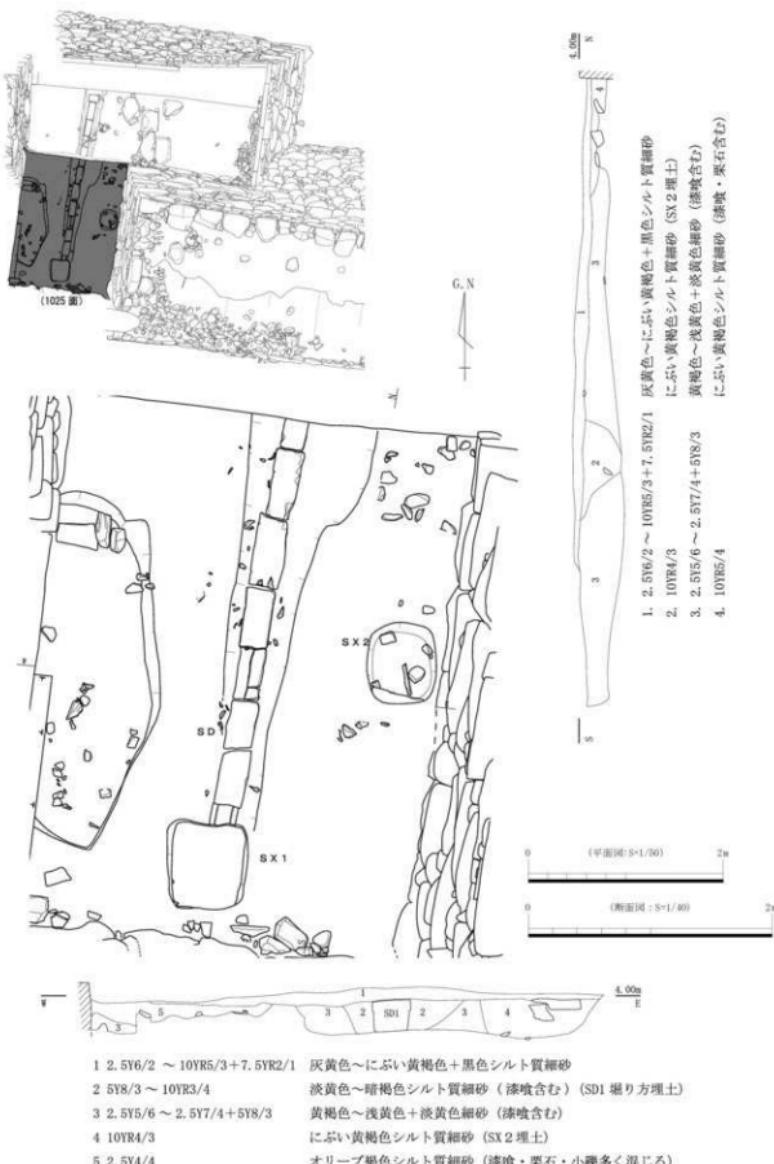
虎口の本来の構造解明に当たっては、前掲の『史跡高松城跡（天守台）—発掘調査編一』にて報告される中川櫓台の水路遺構や櫓門の礎石と同じく、今後の本丸部分の発掘調査に期待したい。



第3-51図 SX 1 完掘状況（北から）



第3-52図 北東隅で検出した集石群



第3-53図 本丸虎口遺構平・断面図